

培う力を明確にした学校交流の実践

— 第4学年 単元名「シンガポールのお友達」 —

前シンガポール日本人学校小学部チャンギ校 教諭

鹿児島県鹿児島市立紫原小学校 教諭 才 川 文 秋

キーワード：国際理解教育，総合的な学習の時間，学校（現地校）交流

1. はじめに

シンガポール日本人学校での勤務3年間で終了した。この3年間で、たくさんのことを学ぶことができた。その中でも、現地校との交流学習では、日本人学校ならではの実践を行うことができた。ここでは、その概略を紹介したい。

2. 研究課題について

図1で示したように海外の日本人学校では、日本の教育基本法，学習指導要領に準じて学校教育が行われている。しかし、生活環境に日本とは大きく違いがある。そのような中で、子ども達に培いたい力は日本と同様であるので、学習内容や指導方法を工夫して子ども達の教育に当たる必要がある。私は日本人学校に勤務するにあたり、自己研修として、「国際理解教育の観点から国際交流活動はどうあればよいか」という課題を持った。日本から遠く離れた外国の地で、日本の教育を行うにあたり、地域のどんな教材をどのように生かして子ども達に学習させることが、国際理解の観点に立った上でねらいを達成でき、子ども達に確かな学力を培わせることができるかということである。

さらに、シンガポールの素材のよさを教師が教材研究することで、新たなねらいや、子どもの学びの発展が期待できると考える。そのためまずは、国際理解のねらいについて考察してみた。

「国際理解」のねらいとして、学習指導要領では以下の点を挙げている。

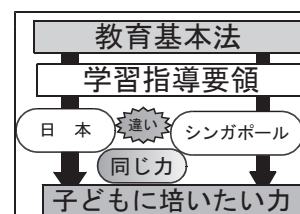
- 1 豊かな人間性や社会性・国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- 2 自ら学び，自ら考える力を育成すること。

このねらいを踏まえ、子ども達が地球上のいろいろな国，地域，人々と関わることになっても、日本人として、「互いの人権を尊重し，お互いに共生していける資質を持った人間」を育成するための多様な学習内容が考えられる。特にここシンガポール日本人学校においては、まさに子ども達の生活圏は、多民族国家である生活すべてが、国際理解教育の学習内容である。

このような学習環境の下、学校教育の中で子ども達に何（学習内容）をどのように（学習方法）学習を展開させていくかはとても重要である。つまり、子ども達に確かな国際理解の視点を持たせるためには、まずは指導計画を立てる段階が重要であると考えられる。その際の視点として以下のことが挙げられる。

指導計画を見直す際に重要と考えられる視点

- 1 学習の流れに、子どもの思いや願いの連続性があり、学びがいのある学習内容になっているか。
- 2 子ども自身が主体的に対象（学習内容）と関わるができるものになっているか。
- 3 具体的に活動を見通すことができ、安全かつ楽しく学習を進めることができるか。



【図1 教育の構造】

このことは、知識・技能を「覚える」といった「内容知」中心の学習活動ではなく、知識自体をいかにして獲得していくかという、自ら学んでいく「学びの方法」を重視した「方法知」中心の学習活動になるように指導計画を見直す段階で検討していく必要がある。その具体的な方法として、学習活動のねらいを基に、具体的な子どもの姿を設定したり、学習活動が展開される中での子どもの思いや願いを想定したりしていきたい。もちろん内容知においても、子ども達にとって、必要感や活動のやりがいを感じるような内容を準備する必要がある。次に、実践を行うに当たっては、ただ単に活動を行わせるだけではなく、子どもの学びの過程を見取り、その変容をねらいと照らし合わせ、子どもの変容を見取った上で、支援を行っていくようにする。また子ども達の追求活動が不十分だったり、不足していたりしている場合は、教師が軌道修正をする必要がある。その際教師が子どもに積極的に働きかけるのではなく、子どもの相談や質問を優先し、その子どもの質問に応じて教師がアドバイスを与えていくような助言的行動を心がけていきたい。要するに教師は、子ども主体の学習を支える裏方あるいは、促進者という役割を發揮していきたい。

3. 研究の実際 総合的な学習 第4学年 単元名「シンガポールのお友達」

(1) 目標分析について

① 活動のねらい

- ア 相手校の友達の思いや考えを受け止め、心を込めてもてなし、友情を育もうとする。
- イ 自分から積極的に相手に働きかけ自分の思いや伝えたいことを様々な方法で伝えようとする。
- ウ 自分の思いや願いをよりよく伝えるために、進んで交流活動の準備に取り組むことができる。

② 活動のねらいをもとに考えた期待する子どもの姿

ア 相手校の友達の思いや考えを受け止め、心を込めてもてなし、友情を育もうとする。

培いたい力・・・人間関係力, 受容力, 思いやりの心, 友情・信頼

- 相手の言葉や表情、行動から相手の気持ちを推し量って受容しようとする姿
- 相手の気持ちを考えた上で、自分の行動を判断し、よりよい関係を築こうとする姿
- 互いに仲良く助け合って活動していこうとする姿

イ 自分から積極的に相手に働きかけ自分の思いや伝えたいことを様々な方法で伝えようとする。

培いたい力・・・主体的に関わろうとする力, 問題解決能力, 表現力

- 自ら自分の課題を見つけ、その課題について追究しようとする姿
- 様々な表現方法から自分の表現活動を選び、表現しようとする姿

ウ 自分の思いや願いをよりよく伝えるために、進んで交流活動の準備に取り組むことができる。

培いたい力・・・行動力, 活動を見通す力, 自分らしさを発揮する力

- 自分の思いや願いの基に、具体的に行動しようとする姿
- 次の活動を見通して、自分にできることはどんなことか考えようとする姿
- 自分にできることや、自分の発想・思いや願いを表現し、自主的に活動しようとする姿

以上のようなねらいと具体的な子どもの姿を目指して活動計画を立て、授業実践していく。

(2) 活動の実際 (学習過程ごとの子どもの様子を中心に)

① つかむ段階

子ども達に、テマセク校のお友達が来校することを話すと、子ども達は、とてもうれしそうな顔を浮かべた。しかし一人一人テマセク校のお友達のパートナーを決めて、その相手と一緒に活動することを話すと、子ども達の表情が一変し、とても真剣な表情になった。「パートナーの友達はどんな友達かな?」「言葉も通じないと思うけど、仲良くなれるかな?」そのような不安も入り交じった中で、この単元が始まった。単元導入終了後の子ども達の意識調査からもわかるように、ただ単に活動させるのではなく、パートナーを決めて交流活動を行うことにより、子ども達の不安や心配はあるものの、活動に対しての切実感が高まったと言える。また、「お相手さんとなんとか楽しく活動したい」「どうしたら楽しい活動になるかな?」というような問題意識も高まってきた。

② 見通す・追求する段階

つかむ段階で、右のように不安や心配を抱えている子どももいた。その子どもを中心にその心情の変化を見取っていくことにした。子ども達は、個あるいはグループで、交流活動の計画を立てた。その



【イングリッシュスタッフの指導】

中で、みんなでする活動では、日本語の紹介ができて、みんなが楽しく、テマセク校の友達が楽しんでくれる活動として、『ジェスチャーカードゲーム』をすることに決まった。このゲームは本校の子どもが問題を、相手児童にジェスチャーで答えを教え、その答えの絵カードをテマセク校の児童が探すというゲームだ。そのカードの裏には、

日本語も書いてある。その活動の準備に向けて、みんなでカード作りを行った。実際にゲームをしたりしてルールを確認した。また個の活動時間については、自分の得意な遊びや、相手を楽しませるような遊びをそれぞれ子どもが考え、準備を進めた。さらにぜひ相手児童と、英語で話がしたいという思いや願いから、本校に勤務する英会話職員(英会話担当)に相手への質問の仕方や話し方を教えてもらった。また交流後にお手紙を書いて、感謝の気持ちを伝えたいという思いや願いから、『サンキューカード』を英会話教員の指導の下、作成した。活動中の子ども達はとても真剣な態度で望んでいた。このことは、具体的

に相手意識を持って活動を見通すことで、子どもの意識の中に切実感や責任感が生まれたからだ。活動前のリハーサルでは、子ども達に達成感を味わわせるために、できるだけ自分たちの力で進めるように支援していった。活動後に、自己評価や相互評価を行うことにより、「さらによりよい活動にして、テマセク校のお友達を楽しませてあげよう」といった意識を高めることができた。

③ 広げる段階

交流会の当日、子どもたちはこれまでに準備してきたことが、上手く進めることができるかととても不安であった。しかし実際に活動が始まると、お互いに緊張感もほぐれ、仲良く交流する姿が見られた。そのための内容として、ジェスチャーカードゲームはとてもよかったと考える。その後の学級の活動や、個人で考えた活動でも、子どもたちはなかなか言葉は通じなかったが、自分の言いたいことをジェスチャーで表現したり、実際にやって見せたりして仲良く交流していた。その中でけん玉と一緒に遊んだ子どもは、いろいろな技と一緒に考えたり、お互いに競争したりしながら交流を深めていた。活動中に教師は、

今日の活動でどんなことを感じましたか。

- ・すごくドキドキした。(22名)
- ・楽しみがふえた。(20名)
- ・がんばろうと思った。(15名)
- ・心配、不安になった。(5名)
- ・早く計画を立てたい。(28名)

心配・不安の内容(複数回答)

- ・相手が喜んでくれるか心配だ。(4名)
- ・言葉が通じないから不安だ。(3名)
- ・何をしたらいいかわからない。(1名)


【つかむ段階授業後の意識調査】



【けん玉で交流する子】

子どもの主体的な活動を見守る立場に立ち、子どもが困ったり、手助けを必要とする際に助言や支援を行った。可能な限り、子どもの主体的な言動を大切にし、その活動や発言に対して「どうしてそうしようと思ったの」とか、「どうしたらいいかな」とか、子どもが相手のことを考えて言動したことを認めたり、価値付けたりするような発問に心がけた。活動が展開されるにつれて、子どもたちの絆も深まり、自分のパートナーと深くかかわる姿が増えてきた。

④ まとめる段階

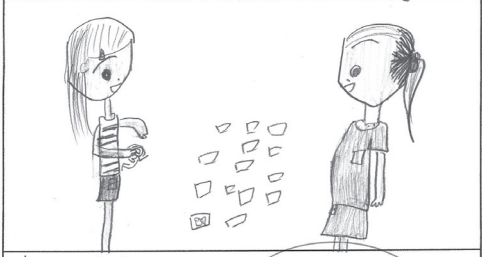


楽しかったテーマセク校との交流会

自分の相手の名前(Janice)

4月21日

同じセク校に住むお友達が大好きなといね。



上の絵は カードゲームをしていた時の事です。お題は えんぴつはすりたのひをまわしているよ。さしてすい。3人のお題が出たけど、相手の子は全部とてくれました。とてもうれしかったです。教室にもどって、お題を最初には、玉をまわす。その後、お題をまわした。カメラを作り終えた時に、お題がなくなって終わりに。お題をまわした。カメラは私の相手の子にあげました。私が考えた事は、言葉がわからなくても、同じ国に教える同じ人間だから、みんな友だちになれるんじゃないかと思

いしました。これからは言葉がわからなくても、お題をまわす。お題をまわす。お題をまわす。

【活動後の子どものワークシート】

より、活動を終えることができた自信や満足感から、「自分知」に気付き、これからもっと活動して学んだことを自分の生活に生かしていこうという態度を培うことができた。右の分析からも分かるように、子どもたちの達成感や成徳感是非常に高い。また、活動の価値についても思いや願ひを感じさせる記述が多かった。

これまでの自分の活動を振り返り、うまくできたことや、なかなか思うようにできなかったことをワークシートにまとめて自分の成長に気付かせた。左の子どものワークシートにもあるように活動を重ねる中で、子ども達は交流を深めることができた。また言葉が通じなくても、お互いに相手のことを思いやり、優しい気持ちで接することにより、よりよい関係を築いていけることに気付き、さらに友達の輪を広げて、自分の生活を楽しい生活にしていこうとする意欲や態度を培うことができた。現地のイングリッシュスタッフ（英会話等）に教えてもらった英語を使って、自分の英語が相手に通じたという達成感や成徳感も高まり、言葉（言語）に対する意欲も高めることができた。まとめる段階で、ワークシートに自分の成長を振り返ることに

| 記述内容についての分析（全28名） | |
|-------------------|-----|
| ○活動の内容について | 28名 |
| ○相手とのかかわりについて | 20名 |
| ○自分の取り組みのよさについて | 18名 |
| ○活動の価値について | 28名 |
| ・人間関係力（友情・信頼） | 25名 |
| ・受容力、思いやり | 7名 |
| ・問題解決力 | 6名 |
| ○今後の意欲について | 15名 |

【子どものワークシートの分析】

(3) 成果と課題

実践を通して以下の成果を得ることができた。

- 目標分析を行うことで、子ども達にどんな力を培っていけばいいのかが分かった。また、活動前に教師がその力を把握することで、活動の中に子どもを見取り指導と評価を行うことができた。
 - 授業前に、これまでの実践のデータやクラスの子どもの実態を把握し、子どもの思いや願ひ、子どもの学びの想定を行って指導計画を見直すことにより、子ども達は生き生きと活動に取り組み、活動を充実させることができた。
- (具体的な例)

パートナーを決めて活動を展開させる

- ・活動の中で、パートナーを決めて活動に取り組ませることにより、子ども達は、活動に対しての切実感や責任感を持って、真剣に活動に取り組み、達成感を味わうことができた。

英会話スタッフの協力

- ・相手とのコミュニケーションに子どもが必要感を感じ、自ら進んで英語での質問の仕方や、あいさつの仕方を学ぶことにより、相手との交流の深まりと、自分自身の達成感を味わうことができた。

また、以下のような今後の課題を得ることができた。

- ◎ 可能な限り子どもの思いや願いを大切に活動を行ってきたが、まだまだ子どもの思いや願いを十分に叶えることができなかった。その思いや願いを目標に照らして吟味し、もっと幅広い交流活動になるような指導計画を作成していく。
- ◎ シンガポールの生活環境のよさを生かし、さらに子ども達の国際感覚が高まっていくような活動を考慮していく。
- ◎ 交流活動は、回数を重ねることで、その深まりもみることができたことから、今後も様々な機会を設定して、交流活動が展開できるようにしていく。

4. 研究課題についての成果と課題

- 本学級の子どもの中には、日本の小学校に一度も通ったことのない児童もいた。これまで私が考えていた「日本からきた子ども達」という概念だけでは通用しないことがわかった。そのことは国際交流を進める意味では、この上ないよさ（チャンス）として捉えることができる。つまり子どもの実態をしっかりと見取り、お互いのもつそれぞれのよさを発揮させていくことが大切だということである。よって、今後もこれまで以上に一人ひとりの子どものよさを見取る姿勢を大切に、子どもから学んでいきたい。
- 本校の児童はスクールバスで登校している。帰宅後もコンドミニウム（住宅）から一人では外出できない環境にある。学校がそのような子ども達の心のオアシスになるような教育活動を展開していく必要がある。

5. おわりに

国際交流活動の授業を実践することになり、とても不安であった。子ども達の生き生きとした活動に、教師も一緒に活動の楽しさを感じることができた。また日々の授業の中で、シンガポールの素材を学習内容として取り扱うことが多いが、「シンガポールの素材を客観的に見る目ではいけない。子ども達にとっては、ここの素材が生活の全てである」からこそ、日本との比較としてではなく、主観的な目で素材と向き合わせる指導が必要であることを感じた。その中で、日本人として「真の国際人」と言われるような子どもの育成に努めていく必要がある。

最後に、赴任して日本語が全く相手に通じなくて悩んだこともあったが、任地での生活を前向きに楽しむ姿勢と、周りの環境といかに深く関わることができるかという精神の大切さを感じて生活してきた。在外教育施設に派遣させていただいたことに感謝し、今後も研修を深めていきたい。